

Raping To Reach You

2006.06.06 ~ 06.25 last dance for BLEACH work

嫌いだ、気持ち悪いと言われてまだ好きでいられるほどあ

たしの気は長くなかったが、すらつとした手足や小さな顔や凛とした眼差しを眺めて惹かれないでいるほどの不感症でもない。多分鳴かせたらそれなりに良い声で鳴くだろうと思つて、そのよく動く口をぼうと見ていた。

授業が終わつてすぐ、たつきはあたしの席にやつてきた。どうやらホームルームの時、思いっきり織姫の巨乳をもみしだいたのが気に入らないらしい。あたしはほおづえをついたままで、彼女の怒った顔を見あげていた。

「だから、織姫に……たら、ただじゃ……だつて……織姫は」
ああもううるさいな。織姫織姫って。

自覚していない同族が一番ムカつくんだよね。あんたがそんなにあたしのこと嫌いなのは、自分も同じモノだつて知つてるからでしょ？ いいから黙つて、自覚もなく噛み付いてくるその白いさわやかな歯を、どっかあたしに舐めさせてよ。ピンク色の歯茎の裏まで、舌をくぐらせてくすぐつてあげるから。ピンク色なら他の上だつていいのよ。織姫の特盛りは確かにやーらかいけど、あんたのソレもちょうど手に収まるい

いサイズじゃないの。

「聴いて……つとに、こんなんじゃ……今度こそ先生に」
ああ、馬鹿だねお嬢さん。あの先生が同性愛をサベツスると思う？ ヤンキーだつてサベツしないスーパーフラットな越智先生をあたしは愛して尊敬してる。それこそ抱きしめて離したくないくらいに。黄金の右手中指を突っ込んでイカせまくっちゃいたいくらいに。

「なんで……フツに、もろと……女が、女を、なんて」
「汚い？」

「そんなの、気持ち悪い」
軽蔑を露わにして、彼女は言った。その目をすぐきれいだと思つた。同時に、すぐ潰したいと思つた。腹の奥に煮えたぎるのは、怒りだ。尊厳を潰された怒り。自分自身を否定された怒り。

「いいね」
「何が」

たつきは尋ねた。
「あたしは覚悟出来るよ。サシで勝負しようか」

そう言って、がたりと立ち上がると出口へ向かった。教室を振り返る。わずかに残っていたクラスメートが少し怯えた顔でこつちを見ていた。にっこり笑って手を振る。それなりにあたしは人気者なのだ。たとえ動物園のパンダみたいな扱いだったとしても。

「……本気なの？」

「たつきが日本で二番目に強い女子高生だつてのは知ってる。だけど、だからってあたしが負ける理由はないわね」

そう言って、指でピストルの形を作った。彼女へ突きつける。「愛はいつだって強いものよ。そっでしょ？」

引き金を引いた。たつきの胸の中心に穴が開くイメージ。全身に穴を開けて両手十指全部突っ込んでやりたい。ピンク色にドキドキする心臓つかみ取って、あたしの手の内で握りつぶしてやりたい。

「……馬鹿みたい」

心底、見下した目をして、たつきは言った。

「いいじゃない。もう一度と、織姫に変なこと出来ないようにするから」

た笹の葉がちくちくと肌を刺す。ぴったり後ろにたつきが着いてきているのは足音で分かる。その雰囲気から勝負前だというのに気持ちがまた緩んでいるのが分かる。

これは試合とは違う。始まりの合図はない。戦いは既に始まっていてどちらかが死ぬまで終わらない。注意深くならなければ勝てない。生きていけない。物陰に隠れて、爪を隠して、牙を研いで、音もなく全て噛み砕くつもりで生きていく。そうしなければ、奇形は殺されると、歴史と経験が教えてくれている。

歩きながら眼鏡を外す。赤いプラスチックのふちは結構気に入っていたし、軽くてつけていても気にならなかった。それに、昔の彼女からのプレゼントだったのだ。こんなことに使うなんて、ひどくもったいないと思った。

でも、そうしなければ生きていけない。後生大事に取っておけるモノなんて一つもないんだ。自分の命と尊厳を守るために、あたしはあたしの持ちうる全てのモノを武器にして戦う。

それを右手に折りたたんで載せる。一呼吸も置かない。

「勇ましいね、王子様」

あたしは肩をすくめて、無防備に背中を向けた。たつきはその背中を攻撃しない。その時既に、あたしは勝利を確信していた。

叩けるときに叩かない奴は、いつまで経っても叩けないままなのだ。

誰にも邪魔されない場所が良かった。どんな声を出しても聞きつけられない場所。あたしはそういう場所をよく知っていた。女の子を手込めにするときによく使うのは体育倉庫だけど、今日はマットの上で優しく抱いてやる気分じゃなかった。もつと乱暴に、気を失わせるぐらいひどくしてやりたい。いや、もつと、気持ち悪いと言った彼女自身のもつと気持ちの悪い激情を目の前に突きつけて、踏みこじってやりた

い。
校舎の裏に回り込んで、足早に進んでいく。上履きのゴム底に当たっていた砂利がごつごつして乾いた土に変わる。足首まで伸びた夏草をかき分けて、竹藪の中へ突き進む。尖っ

振り返りざまに、掌底ごと、たつきの右目に叩き込んだ。息だけで呻いてよろけた彼女の頬へ向けて肘撃ちを喰らわせる。がっんと骨が当たる感触。

が、その肘をしっかりと抱えられる。流石、日本で二番目に強い女子高生。右膝の皿に前蹴りを喰らう。爆発。足下が地面ごと砕け散る幻視。崩れ落ちる寸前に、ぐつとたつきの首に抱きついた。意外なほど細い華奢な首筋へ、強く唇で吸い付いた。

「っー」

たつきが、初めて声を上げた。
無事な方の片足だけでどうにかバランスを保ちながら、その白い皮膚を強く舐めていく。どくりと弾む頸動脈を口腔の粘膜全体で味わっていく。

たつきの腕の力は強い。必死で文字通り食らいつく。足下で抜け落ちた竹の葉が耳障りな音を立てている。気が狂いそうなほど膝が痛む。テニスで故障した時のことを思い出す。その時に見てくれた女医さんとの睦言を思い出す。あれは何番目のひとだったっけ？ 思い出せない。

ゆっくり、首筋から耳朶へ向けて舌を這わせ、指を背中に伝わせて、気をそらしていく。坂道へ向けて押していく。一步、二歩と、もがきながら彼女はあとずさった。かすかに上気して薄く染まった頬の産毛を間近に感じる。べったりと唾液をなすりつけて、尺取り虫のように彼女のかすかに荒れた唇へ向けて進んだ。右目の上が切れて眩しい緋色が見える。眼鏡フレームの赤より、きれいな赤だ。あとで舐め取ってしまおうと思う。でも狙うなら唇が先だろう。思い直してまっすぐ標的へ向かう。瑞々しい唇と唇が触れあつた瞬間、フィニッシュを知らせるように、がしゅんしゅんしゅんしゅん、金網が鳴る。遅れて、枯れた竹葉のひとつらが降った。それを視認して、ようやくあたしは目を閉じた。目を見開いて驚愕しているたつきの顔を見ていては、おかしくておかしくて、笑つてしまつてキスが出来ない。自分の技術を生かせられない。どんな世界でも、技術力は生き残るための武器だ。誰にも負けない一点モノの技術が無ければどんな世界でも生き残っていくことは出来ない。自動車産業然り、国際競争然り。そして、ケーハクな小娘が生き残るためにも、突出した

てやつと血で汚れた自分の手のことを思い出した。手の平の分厚いところに割れたレンズの破片が突き刺さっていた。綺麗なままの左手で丁寧に抜き取った。あたしの黄金の右手中指まで血に濡れてしまっている。HIVや性病のことを考えるならコンドームなりサージカルグローブなり、するべきだろうけど、生憎カバンは教室に置いてきてしまつたし、処女のたつきにその類のリスクがあるとは思えなかつた。あたし自身だつてそういう危険はない。定期的に元カノのところで調べてもらっている。

「じゃあ、犯すよ、王子様」

あたしはそう言つて、この上ない慈愛を込めて彼女へ微笑みかけ、思い出す。ああ、そうだ。セックスには愛が必要だつた。愛は無料でなければいけない。殺しそなくらい憎んで、それが一回りして反転したときに、憎しみはこの上ない愛しさに変わるだろう。今はまだ、憎しみが足りない。

短い髪を挿んで、上を向かせた。たつきは目を細めたままこちらを見ようとする。右目の上、一センチぐらい切れている。あたしは唇でむしゅぶりつくようにその傷口を舐めた。

技術というモノはサヴァイヴするための武器になる。

あたしにとつて、キスはそれだった。

キスは唇と唇が触れあうだけじゃない。頑なにブロックしようとする唇をこじあけて舌を奥へ滑らせ、つるつるした歯と歯ぐきの裏を舐め尽くして、唇の裏と頬の内側と舌の裏と、ありとあらゆる粘膜を入念に刺激して、柔らかな肉と頑なな骨との境界を分からなくさせる。骨髄に毒を流されたように顎の骨がとろけて、抵抗することも出来なくなるように、執拗にねぶり、舐め尽くす。それが、あたしにとつて本当のキス。それ以外は全部ニセモノだ。リアリティを感じるこの一瞬のためだけにあたしの生はある。他の生き方は全部オマケでしかない。たとえ誰かとの語らいであつても、呆れるほど爽やかな屋上から見える青空であつても。

音も立てず崩れ落ちるように、ゆっくりとたつきの膝から力が抜けていく。あたしはトドメを刺すように小さく彼女の唇を噛んで、離れた。

金網がまだ微かに揺れている。

あたしは薄く笑んで、右手で前髪を掻き上げた。そうし

血を唾液で薄めるようにして、丹念に清めた。圧縮プラスチックのレンズの欠片を舌先で探すか、どうやら入つてはいないようだった。まぶたは腫れ始めて、しりかけていた。キスの名残で透명한よだれが唇の横からしたりそだ。ほお骨の辺りが大きく青あざになっていた。きれいな凜とした彼女はもどきにもいないみたいだ。ひどくがっかりして、ヤル気が萎えた。他人の頭は意外と重くて、すぐにあたしは地面へ無造作に投げ捨てた。金網にバウンドして、彼女はぐったりもたれかかった。逃げればいいのに、最高のキスで腰が抜けるらしい。

きれいなモノは汚したくなるね。あたしの悪い癖。

でも、汚したらもう欲しくないんだ。ごめんね。

彼女の手を取つて、その甲にキスをした。泥の味がするそのキスはさよならのつもりだった。

でも、ぐつと顔を上げてこつちを睨み付けて、指先だけ動かしてあたしの目を潰そうとする彼女の左目に少しかだけ可能性を感じて、嬉しくてあたしは息だけで笑った。

ああ、これだからアンタのことを見限れない。素敵ね。

彼女の爪の先を甘く噛む。暴れようとする指を口の中で甘く溶かして、指の又まで唾液でべとべとに濡らして、爪と甘皮の間の敏感なところを歯でこくわずかに触れる。人間の性感帯は全部知りつくしている。あたしに触れられる者は皆、絶頂に達するだろう。たった一人、あたしが指先を向けられない一人を除いて、全ての男と女はあたしの前にひれ伏すだろう。目をうつろに、口を半開きにして、電撃に打たれたように腰を濡らすだろう。

「アンタの綺麗なト見せて。グチャグチャにしてあげる」

彼女は答えない。唇が微かにわなないた気がした。それは恐怖じゃなくて、きつと怒りだ。そういう女じゃなかったら、あたしはこのクソつたれのニセモノ、テロ女に惹かれてない。惹かれていたからこそ、自分の正しさを信じて疑わない彼女のことを許せなかったんだ。

「言いなよ。変態ってさ」

「変態」

さっきよりも大きな声でつぶやいた彼女の目の上の傷口へ指をめり込ませた。緋色があふれ出す。たつきは悲鳴こそ上

げなかったが、かすかに苦痛の息を漏らした。それでもあたしの腹の奥はまだ嫌な感じに熱い。固めた拳でさっき打った頬骨をまた殴りつけた。握った拳の方が折れそうなほど、その骨は硬かった。人間の骨を馬鹿にしてはいけない。そう言えば、酔っぱらった時に誰かを殴りつけて手の骨を折ったことがあった。酔ったイキオイで初対面の女を抱こつしても、黄金の右中指が使えなくて、左手一本で処理したことがあった。気絶したままの敵を置いて、一人で病院の廊下でぼんやり緑色をしたリリウムの床を眺めていたことがあった。遠い十四の夏。冷房が効きすぎて寒かった。

あれ以来あたしは誰かを殴るときは拳を使わないで、出るだけ掌で打つようにしているのだ。もつとも最近殴ること自体が少ない。たつきに殴られるのも悪くないと思っていたからだ。殴ったり殴られたりがコミュニケーションになるなんて思ってもいなかったけれど、じゃれ合いじみた小突き合いは案外クセになった。たつきはいつでも正拳であたしを殴る。正しい拳。正しい彼女の拳。そうだ、彼女はいつでも正しい。まっとうでマジョリテイでがちがちのヘテロ。友達思いで、明る

くて、白い歯を見せて、背筋を伸ばして、からっとした大きな声で笑う。ちよつと乱暴でも誰かを失明させたり障害を残したりはしない。織姫のことが大好きでも代わりを探すために金曜夜に新宿二丁目をうろついたりしない。ハタチ越えたフリしてバーでカクテル頼んだりしない。うろとしく絡んでくるボーイッシュなタチのお姉さんの潰しきれてない胸を

わし掴んだりしない。相手が怯んだ隙に酒瓶で鼻潰したりしない。泣きながら謝ってる相手の頬すれすれを割れたビンの欠片でなぞって遊んだりしない。

そんなことをするのは、あたしだ。

材質がガラスじゃないせいだろう、手から抜き取ったレンズはあまり遊べそうな形には割れなかった。ただ二センチくらゐの欠片はまだあたしの手の内にある。

あたしは血に濡れて光っている割れ口を、たつきの眼球へ突きつけた。目隠しをするみたいに、無傷な左目へ触れそう。な至近距離に据えた。

「見えるの？」

「見えるけど」

それが何か？　と言うような口調で、たつきは答える。脅しには屈しない。それが、尚のこと腹の奥を煮えさせる。愉快で不愉快な受け答え。

「刺して欲しい？」

小さく囁く。睦言のように、ねっとり粘つく唾液を言葉に変換するように、耳の中へ流し込む。

「どうせ、刺せないんだろ？」

たつきは舐めきつてだらけきつた口調で、左目だけであたしをにらむ。澄んでいて、つやつやしていて、丸い大きな黒い宝石のよふかと思ふ。

綺麗なモノを、潰そうと思った。

ゆつくり、左手を濡れた眼球に向けて押し込んだ。顔面に開いた傷口、瞼の内側へ。

たつきの悲鳴が脳髓を揺さぶって、その心地よさに陶然として、あまりの気持ちよさにあたしは吐きそうになった。背筋が脊柱が脊髄が中枢神経が、全部ヤられてる。下から貫かれているよりもずつとずつと気持ちいいんだ。たつきの鳴く声は思っていたよりずつと綺麗な声だった。死にたくない、壊

されたくない、犯されたくない。あたしの全てを拒絶するその声、襲いかかってくるものを否定するその声。それでもかなわないことを肯定出来ず、ただただ産声のような悲鳴を上げる。

じゅくじゅくと透明なかけらが彼女の中に溶け込んでいく。かけらを通してあたしたちは繋がっている。血に混ざって透明な何かが流れ出ていく。生物の授業で牛の目を解剖したときに見たのと同じものかもしれない。硝子体。物体が発する光を視神経まで届かせる透き通ったゲル状の物質。きつともう彼女の左目は永遠に開かない。自分のしたこと、今更あたしはうたえない。彼女が永遠に闇の中にいればいい。そう思ってたは突き刺したんだ。彼女の声が聴きたくて、絶望が聴きたくて、選手生命も青春も何もかも失って、さらさらした光を失った彼女をこそ、あたしは欲した。自分自身では何も持てないあたしは、奪うことで何かを一瞬だけ所持した気持ちになれる。

レンズのかけらをゆつくり九十度回した。ぎちぎち音を立てそうに組織だか神経だか筋肉だかが千切れていく感触が、コントラストが綺麗だった。ワイヤが軋みながらたつきの細い身体に食い込んだ。

柔らかな乳房をぐにぐに揉んでいるのに、少しも劣情が沸いてこない。いつもならじゅんと痛いほど膣の入り口が濡れてしまうのに。胸の奥からこみ上げてくるのはただ空しさだ。叫び尽くして、喉を枯らして、もうひゅひゅと吐息しか出てこない彼女の抜け殻をもみしだいても何も面白くない。光を無くして全身の自由を絶頂の果てに奪われて、もう彼女の中に綺麗な所はない。全部潰してしまったから。

でも、本当に、「も、終わりのなの？」
あたしはすがりつくように左手で彼女の肩を掴む。小さな肩。もう動かない。この手があたしを殴ることはない。もうあの綺麗な光はない。優しくその唇へ口づけた。その顎があたしの舌に噛み付こうとして緩慢に開き、果たせずに唾液を口元からこぼした。

こうなってもまだ戦おうとする彼女が美しいと思った。
まだ彼女の心は、闘争本能は残っている。潰され切っていない。

する。彼女の声がたまらなく甘美に揺れる。喉奥から張り裂けそうに苦痛苦痛苦痛。ただ一色の闇色。憎悪の音。

そ、また、憎め。あたしを憎め。

あたしもあなたのことか。

かけらを抜いて、傷口からどぶりと流れ出たうす赤いしずくを舐め取った。塩辛くて、少し苦い。耳元で彼女の咆哮が鳴咽のように振動する。その怒号は正しい。傷つけられたら怒らねばならない。全身全霊を賭けて傷つけた者へ向けて怒りをぶつけなければならない。

制服のリボンは付けたままで、ブラウスのボタンだけ乱暴に千切った。レイプの時は証拠が残らないように服はゆくり脱がせるのがあたしの流儀だけど、今日は思い切り引きちぎりたかった。その方がずっと遙かに気持ちが悪く思った。合わせに手を入れて思い切り引くと、あつけないほど勢いよくボタンがはじけて草むらの中に飛んで消えた。たつきには薄い水色のブラが似合っていた。意外に胸あるな、なんて馬鹿なことを思いながら、強くブラの上の隙間から血のついた右手を差し入れた。白っぽいレースの所に赤黒い汚れが付いた。

「殺してやる」
そう囁いた瞬間に、たつきの荒れた唇がかすかに動いた。「……いち、ち」
たった三文字だ。たった三文字の言葉。それを聴いただけで、あたしの頭の中で何かがはじけた。天啓に近い衝撃は閃光となって目の前でスパークする。真っ白い闇があたしの網膜を灼いた。何も見えない。その呪詛が何も見えなくした。脳髓の奥へ差し込まれた神経毒のような、その三文字の名前、それにすがる彼女の心。

そうなんだ、ああ、そうなんだ。なんて下らない。結局、あなたは、本当に、ただの下らないヘテロ女だったんだ。あたしと同類なんだと思ってた。同族嫌悪なんだと思ってた。で

もそうじゃない。やっぱりあたしとあんたとは違う生き物。
爪先から頭まで、違う生き物なんだ。

衝撃で目が見えない。けれど、戦いは終わっていない。動か
なければと思った。手に触れているものをただひたすら力の
限り引きちぎった。布が裂ける音は悲鳴に似ていると思いな
がら、指の先に触れる物全て壊すつもりで動いた。暖かな肌
に触れ、本能のまま手探りで性器へ指を滑らした。がさがさ
と布ではない手触り。ビニール？ ああ、生理用品か。う
ん、濡らす手間が省けて良かった。そうじゃないと上手く挿
れられない。引き裂いて血を流させて濡らしてもいいんだけ
ど、手が痛いしね。ホントに処女かどうかだけ確認したかつ
たけど、今更だ。右腕を脇の下に回して、ぐつと持ち上げ
て、ショーツをずり下げる。甘ったるい胸の詰まりそうな女の
匂いが鼻をつく。顔を近づけていくと少し酸っぱいような匂
いが混ざっているのが分かる。両手を内もも掛けて、思い切
り開いた。見えない。けれど感じる。その場所は侵されざる
場所。何人たりとも踏み入れることの出来なかった場所。彼
女の中で本当に綺麗な場所。

福の幻想。完璧な虚構。

彼女の喜ぶ声が聴きたい。陰核へ向けて舌先を滑らせる。
どくんと腫が締まる。嬉しい。舌を入れながらそこを擦れば
もっと気持ちよくなってくれるだろう。血の混じった唾液で
右手中指を濡らそうと舐めた。その瞬間にちくりと手の平
の傷口が痛む。その痛みが現実を思い出させる。

けして、届くことは、無い。

全ては壊れている。

壊したからだ。

あたしが、壊したからだ。

「……………」

うめき声が聞こえた。

あたしは顔を上げて耳を澄ました。

ぼたりと、笹の葉の上にしずくの落ちる音が聞こえた。そ
れで雨が降り始めていたことにやっと気が付く。あたしはゆ
っくりと身体を起こして地面の上へたりこんだ。目を閉じ
て、顔面を雨を受ける。頬を汚した血が雨に溶かされて、薄

そこへ口づける。蹂躪することしかできないあたしのこの汚
れたキスでその場所を貪る。血は既に十分なほどに流されて
いる。憎しみは殺意に変わり、その後、何物でもない衝動に
変わった。胸の内からこみ上げてくる煮えたぎるほどに熱い
思いはもう怒りでも何でもない。ただのアドレナリン。意味も
方向性も位置づけも失って、ただ脳の中で分泌される化学
物質でしかない。血の味とぐろりとした下り物の匂いにげえ
げえと嘔吐いた。それでも次の瞬間には舌先を伸ばして、奥
へ奥へ入れていく。陰毛が口の中に入るのを左手でつまみ出
す。穴奥からわき出てくる液体を音を立てて嚙る。息が詰
まって意味もなく目頭が熱くなる。体中が熱くなる。自分の
膣口が痛い。感じている。彼女を味わって、自分自身感じて
いる。吐く。吸う。舐め上げる。何をしても彼女を感じる。
あたしの唇と彼女の陰唇が出会う。彼女のそこには舌がな
い。だからあたしが頑張って彼女の奥まで行く。彼女に会い
に行く。このためにあたしはキスが上手くなったんだと錯覚
する。彼女のためにあたしは生きてきたんだと誤解する。彼
女のことを愛しているとあたしは思いこむ。幸せな妄想。至

くなってぼたりと手のひらの上に落ちた。まぶたへ落ちた雨
粒の衝撃は、少し痛いほどだった。

冷たい雨が熱くなった身体を醒ました。ゆっくりと音を振
って、目を開けた。しっとり濡れた青臭い竹藪の中に、あた
しと彼女は二人で座り込んでいた。眼鏡がないせいで上手く
焦点が合わないけれど、ついさきまでよりはよく見えた。

糸の切れた人形のように、たつきはうなだれて、金網にも
たれかかったまま泣いていた。目からも鼻からも口からも粘
性の体液が溢れ出ていて、制服のブラウスもスカートも雨に
濡れ泥だらけになっていた。その抜け殻には何もなかった。
それでも綺麗だと思った。

壊しても壊しきれないほどに。

(了)